

♪参加者の感想♪

★とにかくカッコイイ！（宮脇社長との懇談から）



- ・自分の本当に好きなこと、やりたいことは何か考えさせられました。
- ・当たり前なこと、他と同じことをするのではなく、新しいものに挑戦すること、それを一番最初に始めることはリスクも高いですが、必要なことだと思います。
- ・宮脇さんの「模型の疲れは模型でとる」という言葉。宮脇さんは自分の好きなことを一生けんめいやりつづけて成功していると言っていたので、とてもカッコ良いなと思いました。私も自分が大好きだと思える仕事に就きたいと思いました。
- ・ここへ来るにあたって、カップ館仕様の名刺を作ってきたが、交換するタイミングを逃してしまった。話にもあったように流れや機会を大事にするということが重要なのだろう。
- ・田舎にフィギュアという異色の組み合わせが、多くの集客を得、地域貢献にもなっている。そういった異色の組み合わせ、コラボレーションは他の地域でもやろうと思えばできると思う。高知には日曜市や高知城他にもいろいろと考えられると思います。
- ・恥ずかしいなんて思っていたら夢を与えられないのだと思いました。夢を与えるのは恥ずかしさなんか捨てて思いっきりやらなければいけません！
- ・印象に残っているのが、ホビー館の来館者を増やす秘策を質問すると社長さんに「ない」と言われたことです。一つの場所に同じ志を持つものが集まれば、何かしらの化学変化が起こって今までにないものが生まれる、まさに「協同」だと思いました。

★次は何があるんだろう、胸が高鳴る（海洋堂ホビー館について）

- ・大人も子供も楽しめる博物館だということがよく分かりました。“科学と自然”というあり得ない組み合わせ”の面白さを体感できました。
- ・私はフィギュアには興味は無いと思っていたのですが、見学の際に海洋堂さんの多種多様なフィギュアの数々を見て思いもよらず楽しんで自分がいました。また来たいと思います。
- ・次は何があるんだろう、という子ども心にかえったかのような胸の高鳴りが、なるほど、多くの人をひきつけてやまないホビー館の魅力なんだと思いました。
- ・僕はホビー館にきたのは初めてで、フィギュアを生で見た時には、その量と顔立ちの綺麗さに感動した。僕は、個人的にフィギュアを集めたり、友達の見たりと、フィギュアに関しての見識は人並み以上にあると自負しているが、どれもプラモデルばかりで、海洋堂の物を見たことがなかったので、本当に嬉しかった。

★喜んでもらえる嬉しい！（着ぐるみ体験について）

- ・着ぐるみは中の人により、全く異なるイメージを見る側にも与えると思います。キャラクターのイメージや印象付けのためには、そのキャラクターに応じて動きかたを徹底することが必要だと思いました。
- ・着ぐるみを着ているとき、小さい女の子が寄ってきて、握手すると喜んでくれたとき、嬉しくていつの間にかもったりなりきらなればと思っていました。
- ・小さい子ども自分を見てはしゃいでくれたり、いろいろな人が握手を求めてくれたり、周りの人の視線や反応が集まって、自分が自分じゃないみたい不思議な感覚でした。顔が見えないと普段自分ができないような行動、例えば知らない人と握手をしたりダンスをしたりすることができて、すごくテンションが上がりました。

3月16日（土）着ぐるみで おもてなしを体験しました！



大変！
だけど楽しい♪
嬉しい♪

◎経験者から手ほどきを受けてイザ着ぐるみ！

2013年3月16日（土）は四万十町にある海洋堂ホビー館四万十のリニューアルオープン日でした。記念式典を盛り上げるため、高知大学からも学生13人が着ぐるみ要員として参加しました。参加者の半数は地域協働企画立案を受講している着ぐるみ経験者。初体験チームは彼らから手ほどきを受けて、舞台へ。高知のアイドルグループ「はちきんガールズ」とも共演し、セレモニーに華を添えました。

見た目の愛くるしさや違い着ぐるみの中に入るのは体力勝負で大変ですが、学生たちは異口同音に「楽しい」と言います。ホビー館の方や来場者に「ありがとう」と言ってもらえることがやりがいにつながっています。また、お互いの動作を学び合い、どうすればよりイキイキとした着ぐるみに見えるかなど学生同士工夫していました。足元が良く見えない、重くて人の手を借りないとすぐ先までの移動もままならないなどの不自由をお互いにフォローし合う関係が自然に出来上がっていました。

◎模型の疲れは模型でとる、宮脇社長の人生哲学

午後には海洋堂の宮脇修社長と懇談。「海洋堂も成功するまでは貧乏。けれど与えられるのを待つだけでは何も始まらない。好きを極める。自分はとにかく人を喜ばせるのが好き。模型の疲れは模型でとる。それくらい好きなものを見つけると良い。

長期的なビジョンはたてない。その時、その場にチャネリングして化学変化をしなければ面白くない。例えば、四万十川でカヌーでは「自然×自然」で面白くない。化学変化を起すためには異質なモノをかけ合わせる。だからこそ、初年度に14万人のお客さんが来てくれたのだと思う」とのメッセージを頂きました。宮脇社長の一言一言が参加者一人一人の考えるきっかけに繋がっていきました。その一部を左ページでご紹介します。

